玉井學士著『人口思想史論』を讀む

南　亮三郎

一

げに著者の云ふが如く『今日、人口問題を論議する者は多い。而もその著しく世の視聽を惹くに到らない』理由の一つは、抑も『人口問題とは何なりやに關する一般人の理解が充分で無いが爲めである』(序文一頁)。本書は即ち『人口問題とは何なりやに對する一の答解として、古來此の問題が、多くの思想家に依つて如何に取り扱はれ來つたか、其等の思想の長所短所は那邊にあつたか等の點を略說し、以つて將來に殘されたる問題の要所を暗示せんとしたものである』(二頁)。四六版三七五頁の比較的小冊子ではあるが、古くはギリシヤ、ローマの人口思想から、近くはスペンサー、マルクスのそれに至るまで巨細漏さず適確の叙述と批評を施したる好著であつて、藤村氏『人口論』以

降の收穫であると云べよう。評者も亦『之れに依つて、此の問題に對する興味と理解とが少しでも世人の間に行き渡り得』るであらうことを信じ、且つ念じながら、玆に紹介の筆を執らうと思ふ。

二

先づ緒論に於て『人口』及び『人口論』の何たるやが說かれる。著者に依れば『人口とは、一定の時、又は期間に於て、一定の地域に屬する人間の總數の量的表現』であり（本文一頁）、『此の人口を研究することを目的とする學問は即ち人口學又は廣義の人口論である』（三頁）。斯く『人口論は、社會現象の究極的主體たる人を研究對象として、その量的方面を研究するものであるが故に、その關係する所、極めて廣汎である。』從つて『學問としても、人口論は生物學、統計學、政治學、狹義の社會學其の他の社會的科學と複雜密接な關係を有』する。然し著者に依れば『人口に關する一般的研究は勿論此れ等の各々の學問と多少關係を有しては居るけれども、同時に其の中の何れの一學問にも專屬せしむべからざるものである。其の廣汎なる內容と特別なる因果法則とは寧ろ獨立の學問としての人口學の建設を要求するものではないかと思ふ』（三―四頁）。所が今日實際の取扱に於て人口論が『他の學問に對して常に從屬の地位に置かれて居る』といふことは『未だ之れに關する學者の

研究が充分でない結果』である。著者自身は『將來、學者の努力に依つて獨立の人口學の世界的建設の時期が來らん事を切望してやまざるものである』が、右の事情の爲めに、且つは實際社會の慣例に從つて人口論を狹義に解して經濟的人口論の意味に取り、從つて『本書に於て人口思想の研究に着手したのも主として此の經濟的見地から出發したものである』(六—七頁)。

然らばその所謂『經濟的人口論』とは何か。著者に依れば『人口と經濟との關係は大體、之れを二つの方面より觀察することが出來る。一は消費の方面よりであつて、他は生產の方面よりである。惟ふに吾々の……欲望は經濟生活の出發點であつて、其の滿足は即ち財貨の消費によつて得られる。而して此の欲望を有するものは人であり、其の人の量的表現は人口である。此の人口と經濟との關係を眼中に置いて考へる時には、人口の經濟學的研究は一方に於て欲望の、又は消費者の數量的研究であると云ふことが出來る。然し他の一方に於て、慾望滿足の手段たる財貨の生產には、土地、資本等と共に勞働を以て必要缺ぐべからざる要素となし、勞働を有する者は人であり、人の量的表現は人口である。……此の點より考へれば、人口の經濟的研究は又勞働の、又は生產者の數量的研究であるとも言ふことが出來る。斯くして、經濟的人口論は、生產消費の兩方面より人口と經濟との關係を研究しなければならない事となる。人口の數、及び、組織は、人、從つて勞働の質及び量

に大なる影響を及ぼすと共に、消費の質及量にも亦重大なる關係を有して居る。而して此の關係を明白にするのが、經濟的人口論本來の職分である』（七―八頁）。

茲に於て著者は所謂經濟的人口論に就て『原論的方面』と『政策的方面』とを區別する。『以上生産及び消費の兩見地より觀察した所を綜合して考へる時には、生産の利益よりすれば人口の增加は無制限に望ましきことであるかの如く、消費の利益よりする時は寧ろ人口の增加せざることを希望すべきかの如くである。』『人口の增加による消費の增大は、生産の增大によつて相應ぜられて居るか否か。人口の減少による生産の減少は、之に伴ふ消費の減少によつて相應ぜられて居るか否か。人口の增加は消費以上に生産を增加するものであるか、其れとも、生産以上に消費を增加することによつて各人の分前を減ずるものであるか。人口の減少は、消費以下に生産を減ずるものであるか、其れとも、生産以下に消費を減ずることによつて各人の分前を增加するものであるか。此れ經濟的人口論の原論的方面として第一に考究すべき所である。而して此の原論的結論より出發して、此の矛盾をいかに調和すべきか。人口の趨勢をいかに指導すべきかを論ずる、此れ經濟的人口論の政策的方面である』（一二―一三頁）。

本論第一篇は『古典時代』と題し、ギリシャ及ローマの人口思想を研究する。『ギリシャ人口思想

の最も大なる特色』は『人口原論的基礎が無いといふ點と、國家主義的色彩が濃厚であるといふ點との二點』である(二七頁)。尤もプラトーは『生活資料の分配と人口との間に存する相互關係を認め』、『一定社會に於ける生活資料の量を靜的に見て、人口が大ならば大なるに從つて各個人の分配上の分け前は少く、又反對に人口が小ならば小なるに從つて右の分け前は大となると云ふことを認め』て、『人口が過少又は過大の際に當つては、或はその增殖をはかり又は反對にその制限を畫すべき必要あるを說くに至つたのである』が、然しそれは『今日の經濟學的見地より見て、……人口の增加力と生活資料の增加との關係に着眼した』ものではないのである(三九—四〇頁)。此の點よりして著者は、マルサスが自からプラトーの章句を引用して "From these passages it is evident that Plato fully saw the tendency of population to increase beyond the means of subsistence." (Everyman's Lib. ed. Vol. I, p. 142) と言へるは『マルサスの誤解である』と斷じてゐる(三七頁)。又ギリシャ時代の人口施設並に思想は、優種學的色彩の濃厚であることを一特色とするが、然し『此れは其の國家主義的見地から來る當然の歸結と云はねばならない。蓋し國家の隆盛、軍力の充實のためには唯だ、人の量的增加をはかるのみでは充分でない。同時に人の質的改善をも望まなければならないからである』(三二頁)。次にローマであるが、『ローマの人口思想は……人口原論的方面を缺いて居る點に於て、

ギリシャ思想と等し』い。『唯だギリシャ思想が國家原論的立場から、主として、人口の調節を說いたのに對して、ローマ思想が、同じ立場から主として人口の增加を策した點を以つて、兩者の區別點とする』（七二頁）。蓋し『ローマは戰爭の國であつて、軍國主義を旗幟とする。從つて、戰の最大要件たる人に就き、爲政者が、其の增加をはからんとしたる例に富んで居ることは、寧ろ當然であらう。』只然しその原論的方面に於ては『學者論客の特に大に之れを論じたる例が無』く、『多くはギリシャの糟糠を嘗むるに過ぎない』のである（五九頁）。

第二篇は『マルサス以前の近世人口思想』と題し、第一章に於てキリスト敎的人口思想を、第二章に於て重商主義的人口思想を、第三章に於て重農主義的人口思想を、而して第四章に於てズユースミルヒの人口思想を取扱つてゐる。然し著者が人口思想史上に於て特に重視する所のものは云ふまでもなく Mercantilists 及び Physiocrats の思想である。蓋し經濟的人口論の萠芽は前者に發し、人口制限の究極原因としての生活資料の重視は後者に始まるからである。即ち先づ重商主義者の人口思想は『過去の政治的人口思想と、近代の經濟的人口思想との中間に位して、此の兩者の間の橋梁の如き思想的立場を有して居る。即ち一方に於てギリシャ、ローマ等過去に於ける人口思想の國家主義的色彩を濃厚に繼承して居ると共に、他方に於ては、近代の經濟的發展に伴へる思想上に於

ける經濟的要素の優越を、人口に關する論議に應用して居る。』『從來の人口思想は、其の增加を歡迎するに傾くものでも、又は其の制限の必要を認めるものでも、主として其の理由を國家の政治的完成の必要といふ點のみに置いて居るに反し、重商主義者等が新たに經濟的根據からして、其の人口政策をたてたといふ點、此れが多くの學者の彼等を以つて近代の經濟的人口論の出發點となす所以である。勿論經濟的根據と云つても、主として國家經濟若しくは財政の見地からの根據であつて、今日の所謂國民經濟的根據は餘り强く主張せられなかつた。……然し、尙廣い意味に於て經濟的根據の上に立つて居ると云つて大いなる間違は無い。後世の純國民經濟的人口論の少くとも萠芽を認めるのには之れで充分であらう。』『斯くして重商主義的人口思想は政治的又は國家學的人口思想の最後のあらはれであると共に、又經濟的人口思想の最初のあらはれであると云つて、大體に於て正當である』(一〇二—一〇四頁)。次に著者は重農學派的人口思想として、モンテスキウ、ルーソー、ケネー、ミラボウ、デユポン、メルシエ、ペーリー、スミス、フランクリンを擧げ、『重商主義的人口思想が一般に人口の福音を說き、其の直接の增加策を講じて顧みる所がなかつたのに對して、重農學派的人口思想が人口と生活資料との關係を重視し、結局人口が生活資料の制限を被るものであるといふことを認むるに至つたのは確かに大なる功績である。然し乍ら、其の人口の基礎たる生活資料

の增加力といふ點に大いなる注意をはらはず、從つて人口の增加力と生活資料の增加力との間に如何なる絕對則ありやの點をも眼中に置かず、只漠然生活資料の充實により人口の增加をはかり得べきことを說くに止つたのは、重農學派的人口思想を人口論として尙完成の過渡期にあつたものと見做さなければならない所以である。而して右の絕對則の認識は矢張りマルサスの人口論の出現に俟たなければならなかつた』と說いてゐる（一三五頁）。

第三篇は『ウヰリアム・ゴドウヰンの思想』を、而して第四篇は『マルサスの人口思想』を取扱ふ。ゴドウヰンやマルサスは已に幾度となく吾國の學者に依つて反覆叙述された所であり、從つて本書に於ても此の點に關しては別に新しい見解なり構想なりを窺ふことを得ない。只然し第三篇に、比較的多數の頁を費して世に埋もれたるゴドウヰンの反駁書『人口研究・マルサス說駁論』（註）を紹介されたるは寔に至當の措置として、周到なる著者の研究に新たなる敬意を表せざるを得ない。正しくも著者の云へるが如く『此のゴドウヰンの人口に關する著書は、其の前著「政治的正義」の如く、世に喧傳せられることなくして、埋もれて居るやうではあるが、マルサス當初の論敵たりし其の人が、更にマルサスを目標として著はした論駁の論駁として歷史的に興味のあるものであるのみならず、人口に關する社會主義的思想の先驅をなして居る點に於て、學問上相當重大な價値を有

するものである』(一六六頁)。評者も亦『人口研究』を繙いて不遇の思想家に熱涙をそゝぐこと一再に止どまらないが、未だその研究を世に問ふに至らないのを遺憾に想ふ。

(註) ゴドウヰンの『人口研究』の出版されたのは一八二〇年である。著者は本書一六五頁、及び一八九頁の附註に於て『一九二〇年』と記してゐるが、之は誤植か何かの間違ひであらう。尚ほ此の機會に、拙稿『藤村學士著「人口論・マルサス說の研究」を讀みて』(國民經濟雜誌大正十四年十月號所載)の文中、『ゴドヰンの：第二回目の答辯書は、余の一讀したものは慥かに一八三〇年出版のものであつた』(一三一頁)とあるは『一八二〇年出版』の誤植につき訂正しておきたい。

第四篇『マルサスの人口思想』に於て著者は先づ第一にマルサス說の先驅者として伊太利學者ボテロやオルテスを紹介し英獨の諸家にも及んでゐる。次にマルサスの『生立並に環境』から『人口論第一版の要領』を記し、更に進んで『人口思想の原論的方面』及び『政策的方面』を分ち詳述し、最後に簡潔なる『批評』を加へてゐる。今茲でその仔細を紹介する要はない。茲では唯だマルサス說に對する著者の態度を記しておくに止どめよう。著者は『究極の理論としてはマルサス說の眞理である』ことを認める。然しその所謂人口の原則が現實且つ不斷に作用するといふ點に於ては疑を挾むのである。即ち曰ふ『結局、理論として、マルサス說の中心思想は之れを認めざるを得ない。蓋し一方に於て地球の面積に限りがあり、土地に報酬漸減の法則が存在すると共に、他方に於て、人

間の繁殖力が絶對になくなつてしまはない限り、幾百萬年の後には、地球の全地域が利用し盡されて、此れ以上生活資料の增加をはかるべき方法がなくなり、結局理性的に人口制限の方法を講ずるにあらざれば、人口の壓迫より生ずる罪と厄とを除去すること能はざるに至りもするであらう。けれども、是は唯だ結局の理論であつて、實際上の問題として、果してマルサスの說くが如く、生活資料の增加毎に其れ以上の割合で常に人口が增加せんとして居るかどうか。今日直ちに道德的抑制を行ふのでなければ、必然的に罪と厄とが發生するに至るものであるかどうか、といふことになると自ら別問題である』と（二六八頁）。

最後の第五篇は『最近世』と題しマルサス以後の人口思想の發展を概說する。先づ第一章は『最近世に於ける反マルサス主義』であつて、生物學的根據より人間の繁殖の減退を說くダブルデー、スペンサー、ケリー等の生物學的樂觀說と、『統計的に人口と生活資料との調和を說き、又は理論的に人口の增加に伴ふ生活資料の適當なる增加を證明せんとする』グレー、イーヴレット、グラハム、ウエーランド、シニオア、アリソン、サドラー、バスチヤ、ルヴアシウル、リスト等の經濟學的樂觀說と、『人口に關する普遍的法則の存在を否定し、社會組織の異なるに從ひ各特異の人口法則ありとなし、人口過剩を以て資本主義的社會組織特有の現象である』と考へるマルクス一派の社會主義

的人口思想とを叙述してゐる。第二章は『正統派經濟學の態度』としてマーシアルや吾國二三の學者の典型的所說を揭げ、最後に第三章は『新マルサス主義』と題してその意義、發達、論據、方法等にかなり適切な叙述を與へてゐる。新マサス主義に對する著者の態度は、『此の方法により、社會上、經濟上の一切の弊害を救濟し得べしとなすが如き見解には全然贊成し得ない。』然し、『社會改造を第一義としつゝ、產兒制限の補助的効果を認むるカウツキー一派の社會主義的新マルサス主義、並に現在の社會は其の儘でも產兒制限の實行によつて社會弊害の一部を除去することが出來ると考へる穩和新マルサス主義の主張は、或る程度まで之を認める』といふに在る(三六九頁)。而して其の方法に就ては『今の所、新マルサス主義の說く如く科學的避姙方法に贊成する外はない。他の一切の方法は、無効、有害、若しくは一般的實施が不可能である』(三六九頁)として、人工的去勢、墮胎、亂交、制慾(マルサスの所謂道德的抑制を含む)等を排してゐる。

斯くして著者は人口思想の史的發展を叙述し了へた後ち『結論』の條下に於て『茫々乎として數千年、思想は年と共に發展し來つたやうではあるけれども、人口問題は、今日尙ほマルサス說を中心として、渦を卷ける未決の謎である』とし、『此の未決の謎を誰が如何に解決するか。其れは尙將來の問題である。確實な統計材料と、現代の新しい學問の研究方法とにより、人口に關する法則を

尋ね出し、之れに纏る一切の社會的紛紜を截り開くこと、其れは新時代の學者の任務である』と論じてゐる（三七四頁）。

三

以上本書の大要及びその特異性を紹介し得て大過ないかと思ふ。以下評者自身のデイレッタンチズムを謝しつゝ、若干の讀後感を述べさせて貰ひたいと思ふ。

先づ第一に『人口論』乃至『經濟的人口論』の概念が未だ充分明かでないやうである。著者は人口論を以て『既存のいづれの學問にも專屬すべからざる獨立の學問としての立場を要求するものである』（六頁）と云つてゐるが、單に『其の關係する所、極めて廣汎である』といふことでは一つの學問を獨立せしむる因由とはならない。殊に著者は人口論を以つて『人を研究對象とし、其の量的方面を研究するものである』と解してゐるが、かゝる見地に於て、果して能くその所謂人口論と統計學とを分ち得るであらうか。人口論が單に人間の量的研究に盡くるならば、如何にして『既存の何れの學問にも專屬すべからざる獨立の學問としての立場を要求』し得るであらうか。簡單に謂つて、人口論の學として成立する根基如何。又著者は『經濟的人口論』を以て『生產消費の兩方面よ

り人口と經濟との關係を研究』するものであると解してゐるが、然し此の見解は所詮マルサスに於けるが如く人口と生活資料との比較速度の問題に歸着するやうである。之れ著者が繰り返へし、『今日の經濟學的見地より』する人口問題は『人口の增加力と生活資料の增加との關係』に在りとし(三九頁)、此の關係に關する『絶對則の認識は矢張りマルサス人口論の出現に俟たなければならなかつた』と曰ふ所以でもあらう(一三五頁)。然しその所謂經濟學的見地よりする人口問題は、果して生產消費の兩面よりする人口の量的研究に盡くるであらうか。經濟的人口問題は果して能く、人口と生活資料、及び之れと生產組織、分配組織、一般的に謂つて社會組織との密接なる三角關係を究明せずして說き得るであらうか。著者はマルサス說を批評して『彼は分配の要素の重要なることを無視した』と云つてゐるが(二六九頁)、卑見に依ればマルサス人口論は或る程度まで以上三個の要因の間に存する密なる結びつきを究明せんとしたものである。況やマルサス以後の人口論分けても社會主義人口論者は第三要因の優越を力說する。此の點を顧みずして人口問題の解決は不可能である。——以上二點に就て今少しく透徹せる論述を欲しかつたと思ふ。

第二に、ゴドウキンの紹介は詳細を極めたるに拘らず、彼れが一八〇一年に公けにしたる第一回の答辯書——『人口研究』は第二回の答辯書である——に就ては何等言及さるゝ所なかつたのは、

心ある讀者をして少しく物足りなさを感ぜしむるであらう。固より第一回の答辯書 Reply to the Attacks of Dr. Parr, &c. 1801. は僅々八十頁の小冊子であり、殊に『人口論』の著者に答へたる個所は其の央ば以降であつて學問的重要の度に於ては到底晩年の『人口研究』に比すべくもないが、此の兩者を比較參考することに依つて吾々は、『人口研究』に於て『殆んど毎頁マルサスと云ふ文字を見出さゞる頁の無い位、口を極めてマルサスに反對し』、『焦慮的反感を催ほ』さゞるを得なかつた彼れゴドウヰンの心情に、より深刻なる同情と理解とを抱き得るであらう（一六七頁）。加之マルサスは、その第二版に於て初めて挿入した『道德的抑制』の觀念に就て、ゴドウヰンの此の答辯書より或る深き示唆を得たと思はるゝ節がある。何れその詳細は後日の研究に讓るとして、茲では唯だその存在のみを記すに止どめよう。

第三は、マルサス說の中心思想に關する著者の解釋に係はる。上來既に紹介せる所の如く著者は『究極の理論としてマルサス說の中心思想を認める』が、その理由は『地球の面積に限りがある』といふこと、及び『人口の繁殖力は絕對になくなつてしまはない』といふことに在る。從つて著者によれば、マルサスの人口原則は現在不斷に作用するといふに非ずして『幾百萬年の後』、『地球の全地域が利用し盡され』た後に初めて作用するに『至りでもするであらう』と思はるゝのである（二六八

頁)。然し之れは果して『マルサス説の中心思想』と云ひ得るであらうか。少くともマルサス説を斯く解するは正當であらうか。卑見に依れば答は『否』と云はざるを得ぬ。マルサスは自説を斯く解せらるゝことをいたく忌避してゐた筈である。若し人口の壓迫といふことが然かく遠き將來のことに屬するならば、吾々は全てを神の攝理に委して社會改造の大業に着手すべきであつた。如何せん困難は焦眉の急に迫りつゝある。人口の壓迫は不斷且つ現實に作用しつゝあるのである。――それがマルサスの立場であり、そして同時に又ロバート・ウオレスの人口論から區別さるゝ重大なる特異點でもある。マルサス研究の一權威エドウヰン・キャナンの剴切なる記述を借りるならば、――

"If he had merely desired to prove, like Wallace, that the growth of population must *eventually be checked*, he would have been on firm ground here. The earth is limited in size, and obviously there must be some limit to the population which can exist upon it. But he constantly rejects with contempt any such interpretation of his doctrine. He meant to prove that checks to the growth of population are *always necessary*, and when he says 'the power of population is indefinitely greater than the power in the earth to produce subsistence for man,' he is thinking of *the present and not of a remote future*." (Theories of Production and Distribution. 3rd ed. p. 136.)

從つて若し著者の如くマルサス説を解するならば、そは最早マルサス説ではなく、却て彼れが極力

排斥した所のウオレス説に墮するに至るべく、又若しマルサスの所謂人口の壓迫は imminently and immediately に現はれないと云ふならば、そは正しくマルサスに説に對する致命的批評を意味するが故に、著者は、何故に然るかを論證するの義務を免れ得ないであらう。

最後に、マルサス以後の人口思想の發表の叙述は、それ以前の叙述に比して簡に失してゐないかと思ふ。殊に輓近の人口論者として著名なるブレンタノーやオッペンハイマーの名を逸し、又『特に社會主義的として別に掲ぐる程の特色を有するものでは無いから』との理由の下に（三二〇頁）、カール・カウツキーを除外されたのは甚だ遺憾に堪えない。ヘンリー・ヂョーヂやニッチは割愛しても、カウツキーだけは、マルクス以後の社會主義人口論者として充分にその所説を吟味して欲しかつたと思ふ。

遮莫、『新しい思想的原則の建設の爲めには、過去數千年に亙つて、吾等の祖先の辿り來つた精神的努力の跡を、追懷し、吟味し、批評すると云ふことが、最も大切であると思ふ』（三七四―五頁）。此の意味に於て、評者は重ねて茲に著者の勞作に畏敬の念を表し乍ら、本書が『新時代の人口問題研究者に對して、少しでも、研究上の暗示又は刺戟を與へ得』るであらうことを祈つて已まない。

（東京清水書店刊、定價貳圓八拾錢）

―十五・四・一―